

ユニットケアと地域福祉

宮城県桃生町・社会福祉法人東北福祉会せんだんの杜ものう 副社長

山越孝浩 Yamakoshi Takahiro

いまなぜ、ユニットケアから地域を志向するのか

ユニットケアの導入として、特別養護老人ホーム(特養)や老人保健施設(老健)等の施設において住みやすい環境づくりをするために、人員配置の工夫や施設内の居住環境を工夫することから入る施設が多いように思う。しかし、居住空間や職員配置など施設を居心地の良い場にするのとあわせて、施設に入居する前の自宅での生活を少しでも長く続けたいという誰もが思う願いに目を向け、ユニットケアに生かしていくことが必要ではなかろうか。

ユニットケアを指向するいくつかの施設は、理念の具現化への目標として、どうしたら自分も入りたくなるような施設づくりができるかを目標に据え、さまざまな取り組みを行ってきた。施設関係者の多くや私自身も同様であるが、自分たちの施設がユニットケアや個別ケアをいかに充実させても、自分の施設には入りたくないという意見が大半を占める。それはユニットケアを充実させても、結局は、施設に入るよりはいつまでも自宅で生活し続けたいということでもある。そもそも終の棲家として特養の工夫の仕方(ユニットケア)を考える前に、「だれもが住みなれた地域でいつまでも」という普通の生活を可能にするための議論が必要である裏づけとも言える。ユニットケアを議論するときに自宅への思いなくして施設のありかたを議論するのは小手先換えの議論ではなかろうか。

特養・老健・医療施設ユニットケア研究会代表の武田和典さんのユニットケアは「その人らしさが入口で出口は地域」という発言は、その人らしさを継続するための支援方法のひとつがユニットケアであることを意味する。着目す

べきは、誰もが望む地域(自宅での生活)で支える仕組みを持続させ、いつまでも自宅で生活することができる工夫からユニットケアが出発するということを意味している。

この「ユニットケアと地域福祉」という大命題に立ち向かうべく、具体的な宅老所やグループホームの事例やユニットケア実践施設の事例を通して、その糸口を紐解いていくこととする。

ユニットケアから地域へ／宅老所・グループホームの試み

自宅か施設かしか選択肢がなかった1980年ころより、デイホームや宅老所・グループホームとよばれる小規模ケアホームが出現し始めた。家族だけでの介護を、介護者が体調を崩すまで続け、介護を続けることが困難になると施設入居という限界になる手前からサポートしたい。そんな在宅生活支援への思いから1990年ころより全国各地でつぎつぎと広がっていった。

1998年に行った宅老所の全国調査で、宅老所の数は600か所を越えている。宅老所を始めたきっかけに対する回答は、「自宅に祖母がおり、近所のお年寄りといっしょに楽しく語らう場所を」という理由や、「施設で工夫したが理想的な介護に至らず、生活の場として開設」といった自宅の延長線上での発想がその中心をなしている。特養におけるユニットケアを始めるずっと以前に、地域からユニットケアの根底となる小規模ケアが生まれていた。この小規模ケアホームは、痴呆症の高齢者を支えるのみならず、身体状況が重度化しても最期まで在宅生活を支援するホームとして、在宅福祉の拠点として有望視されている。

ユニットケアから地域へ／宅老所・グループホーム的ケアが大規模施設へ

現在、ユニットケアとよばれる手法として、上述のような宅老所・グループホーム的ケアを特養内に導入する取り組みとして実践されてきたのは周知の事実であるが、当初、小グループでのケアを導入しようと考えた多くの施設で取り組まれていたのは「逆デイ」とよばれる小規模ケア拠点を地域に構える構想である。福島県須賀川市の「シオンの園」や仙台市青葉区の「せんだんの杜」、長野県真田町の「アザレアさなだ」での取り組みである。後に地域分散型サテライトユニットケアと呼ばれるものである。

これら「逆デイ」とよばれる活動は、特養内の「しつらえ」を工夫するだけでなく、そもそも暮らしていた地域生活を取り戻すことから始められた取り組みである。せんだんの杜では、3人の痴呆性高齢者の「生活の場」として、特養内の2階デイルームを一軒家の居間のように空間設定したところから始まった。「デイホーム」とよばれるここでは、自分の居場所となる関わり・空間づくりに配慮していくことで、生活している高齢者が、「介護を提供する⇒される」の一方向からの関係ではなく、利用者同士の「お手伝いをする⇔される」の関わりと変化し、お世話をするという一方向の関係からともに生活をするという双方向の関係へと変化していった。この変化に驚いた家族の人から空家になっている民家を提供してくれることになり、日中は一軒家での生活をし、夜は施設に宿泊するという利用者6人、職員4人の逆デイが始まった。

せんだんの杜における逆デイでの取り組みは、出発が施設の一室からではあったものの、施設内の工夫のみに執着しなかったのは、発想が地域（自宅）で生活していたころの「私らしさ」から出発した点である。自宅と施設の間でできた逆デイの発想は、施設からのベクトルではなく、自宅からの延長線上にあった。この自宅からの発想が逆デイを利用者の視点に近い発想で取り組むことができた理由と考える。

この逆デイでの取り組みが、施設内に波及していったものをユニットケアと考えると、施設内の工夫にとどまらないその人らしさを引き出すための関わりの大切さがみえてくる。あくまでも施設という限られた枠のなかでの工夫よりも、もっと大切なその人らしさを重要視した結果、施設内に工夫が必要になり、個人の持ち物や共有スペースのあ

これら宅老所やグループホームの方々が地域での生活にこだわり、大切にしていたのは、その人らしさをまるごと受け止めることではなからうか。これまで特養や老健が介護を重要視するあまりその人らしさを失ってきた反省から、「問題解決型」から「受容型」の発想へと転換しているのがうかがえる。生活をするうえで課題となる徘徊や不潔行為などを課題としてとらえるのではなく、寄りそうことからはじめればこれまで問題行動と考えていたものが問題ではなくなると宅老所やグループホームなどの小規模ケアホームの人々は言う。

富山県富山市にある「このゆびと一まれ」の惣万佳代子さんは、徘徊という行為を自らの実践を通して検証している。5時間ずっと「散歩」をされていたお年寄りが見つかったときのことを話され、猛暑のなか、見つかったときに「いやー、みなさんこんにちは」といつもとかわらない表情でそのお年よりは挨拶をされ、スタッフがお茶とまんじゅうを差し出すと「みなさんもどうぞ、どうぞ」とすすめかえしてくれる。5時間ずっと歩き続けたのだと思うが、日焼けしたすがすがしい顔をしていた。その顔を見て、思う存分歩きたかったのであろう、すぐに見つからなくてよかったのではと無責任なことを思いつつ、世のなかで忙しすぎるから、痴呆性高齢者は自分の足で歩いて世のなかを見て回っているように思うと語る。

事の真相はさておき、なぜ惣万さんは見つからなくてよかったと思うことができたのか。また、あるとき食事をしていてのこと。スタッフがお手伝いをしていて、スイカの種を取って食べやすくして食事介助をしていたところ、真剣なまなざしの利用者に怒られたことがあるという。「すいかの醍醐味は食べながらぷーっと種を飛ばすことにあるのに、なぜその楽しみを奪うのか」と。またあるときは「そばというのはつるっとノドごして食べるのに、何で短く（食べやすく）切って出すのか」と怒られたという。

これらの事例から、介護を必要とする人という前に、「散歩を楽しみたい」という当然のニーズは存在する。それなのにこれまでの介護観では好きに歩く（散歩する）ことを肯定しないで、痴呆性高齢者が歩く＝徘徊という公式にあてはめて考えてしまう。宅老所やグループホームなどの地域に存在する小規模ケアホームのおもしろさは、その人のおかれている状態だけでその人をみない、言い換えれば症状からではない、その人の意思を尊重できるかわりを大切にしていることにあるのではなからうか。

りかたを検討することにつながってくるのである。

特養での経験をもつ「第2宅老所よりあい」の村瀬孝生さんは、その人らしさを引き出す関わりについてのむずかしさをお茶飲みというテーマで語られていた。

宅老所で働き始めたとき、特養での経験を省みて、お年寄りとゆっくり時間を過ごすようお茶のみをしていた。「第2宅老所よりあい」の自宅のような建物のなかで、何の日課もなくただゆっくりと時間が流れるそのなかでお茶飲みをしていた自分が、いつの間にか湯飲みのなかのお茶がなくなることに集中し、お茶は水分に、ゆったりとした環境と時間は、水分補給介助のためへと変化していた。もともとゆっくりお茶を飲み、時を楽しむようにお茶を飲んでいたものが気づかないうちに湯飲みのなかの水分を意識し、湯飲みをカラにすることを考えていたと言う。

地域で生活していたときには、どんな環境においてもお茶が水分へと変化してしまうことは考えにくい。なぜ、宅老所でありながらもお茶が水分になり得たのか。小規模で家庭的な環境にあっても、意識次第で宅老所のメリットを捨ててしまうことにつながるのである。宅老所やグループホームといわれる地域に存在する小規模ケアホームは、小規模だから、家庭的だからという理由だけで痴呆性高齢者も落ち着くことができるのではなく、常に家庭にいたときと同じような生活を振り返る機会を多くもつことによって小規模で家庭的なメリットを発揮することができるのではなかろうか。

ユニットケアから「地域ケア」へ

これまでのユニットケアの議論では、「ケア」に関する議論がその多くを占め、地域での生活をサポートするソーシャルワークの議論が皆無であった。特養の高齢者たちが地域での生活を「逆デイ」という形で始め、地域での自分らしい生活を取り戻す機会を得るとき、地域での生活をサポートするコミュニティの開拓が必要となる。宅老所やグループホームのような小規模ケアホームでは、多くがその土地で長年暮らしてきた人が運営する場合が多く、無意識のうちに地域の人々との関係や土地柄になじんだ存在になっている。視点をかえてみると、地域になじんだ生活支援ができなければ、地域のなかで存在できないとも言える。

改めて宅老所やグループホーム、ユニットケアを実践する施設において、地域になじんだ利用者主体の生活支援を

考えたときに、そこで生活する地域住民の生活は確保されているのかという疑問にあたる。特養の入居者の場合、求めるか求めないかはべつにして、必要な支援をうけられる体制整備が図られている。自宅（居室）においても緊急通報システム（ナースコール）が整備され、必要の都度援助者（職員）をよぶことができ、ささいな相談もすることができる。何より物理的な環境はべつにしても、気軽に相談できる人間関係が成立し得る環境が整っていると言えるであろう。一方、在宅（地域）で生活する高齢者は、介護の必要などときに、ホームヘルパーや訪問看護師が派遣され、介護のみの支援をうける。緊急通報システムにしても、緊急であって気軽にコールする機能はもっていない。日常生活相談をしたいと考えたときには、在宅介護支援センター（以下「在介」という）や保健師等の援助者をよぶわけだが、年に数回程度の訪問では、人間関係をつくることすらままならないまま、自分の経済基盤の相談やいちばん恥ずかしいと思う身体的相談まで見ず知らずの関係に近い援助者に相談しなければならない。

この、施設における対応のありかたと在宅（地域）で生活する高齢者のありかたの不整合を是正することが求められているのではなかろうか。その第一歩が逆デイとなり、地域ニーズに応じてサービスが変化していくことで、気兼ねなく利用できるまちのサービスセンター的機能となることができる。地域に身近な拠点を大規模施設が進めていくことで、施設内だけに偏った見守りのネットワークだけではなく、地域で安心して暮らすことのできるシステム（地域分散型サテライトユニットケア）を地域になじんだ形で展開することにつながるのではなかろうか。

サービス提供事業者から豊かに生きる地域づくりの拠点へ

特養・老健におけるユニットケアの取り組みは、高齢者をサービス利用者としてのみ見るのではなく、特養・老健の存在する地域に住む高齢者としての視点で事業展開しているように考えられる。そもそも、ユニットケアの素となる宅老所やグループホームの成り立ちが、老親を介護するために本人も家族も納得のいくサービスを提供してもらうサービスが身近にないことや、地域に住んでいる高齢者の生活を自宅にいながらにして継続できるためのサービスを提供したくて始められたものである。

これは、民間非営利組織のミッションでもあるが、自ら豊かに生きるためにいま何ができるのかという豊かな地域生活の実現という目的をもって、その目的を達成するために必要な手段がサービス提供を通じて可能となると考えたからこそ、自宅を開放してまで宅老所やグループホームなどの小規模ケアホームを始めたわけである。だからこそ、地域に根付く活動を非営利で提供することで、豊かに生きるための地域づくり（福祉コミュニティづくり）を宅老所という形態を通じて模索しているのである。

一方、特養・老健におけるユニットケアでは、建物や利用者をユニット（グループ）分けするためではなく、これまで生活してきた環境（地域での環境）と同じような環境を特養や老健のなかで可能にする模索の結果生まれてきたものであることからしても、これまでの貧困救済の考えかたや、病院を出されることになっていく場所がないから特養や老健へまず、といった最低限の生活の保障をするための施設ではなく、老後の生活の場の選択肢の一つとしての特養や老健になるためにユニット（生活の場）づくりをしているのである。だからこそ、「ユニット」ではなく、「ユニットケア」とよばれているのである。

特養・老健が始めた「逆デイ」の目指しているものは、単なる地域に身近なところで福祉サービスを提供しようとするだけでなく、まさに地域づくりとしての拠点機能を、期せずして果たそうとしているのである。

宅老所やグループホーム、特養や老健におけるユニットケアの展開に共通して言えることは、いまある現状に留まらない展開に面白さがある。せんだんの杜におけるデイホーム（逆デイ）の試行も、地域に存在する真の家庭を否定し、施設内での家庭的な環境をつくることを目的（ゴール）としているわけではなく、一人ひとりにあった個別ケアの模索プロセスのなかでの一つの方法にすぎない。

宅老所やユニットケアの展開は、サービス提供という手段で終わってしまっただけでは、住民のニーズを充足することはできない。時代背景や住民意識とともに事業形態は柔軟に変化しても、活動の基礎となる「地域でだれもが普通に暮らす」目的は変化しない。変化するのは、方法や手段であり、ニーズにそった求められている形を開発したらまた、目的に戻ることができる。

「逆デイ」の形を最初にとったせんだんの杜では、設立当初の平成8年より、部課制をとり、生活支援業務については「生活福祉部（現：高齢福祉部）」、ソーシャルワークについては「地域福祉部」、事務全般については「総務部」と

いう3部制を導入していた。そのなかでも、地域福祉部は相談課と開発課（現：地域福祉課）を置き、相談課のソーシャルワーカーは担当地区を分担し個別支援業務にあたり、施設内外のボランティア活動や地域で活動したくとうずうずしている住民の啓発、ボランティアグループの組織化支援などのコミュニティワークについては地域福祉課が担当する役割分担をしていた。これらの地域へのアプローチがあるからこそ、逆デイが地域で受け容れられる土壌づくりや地域住民との協働が図られるのである（図1）。

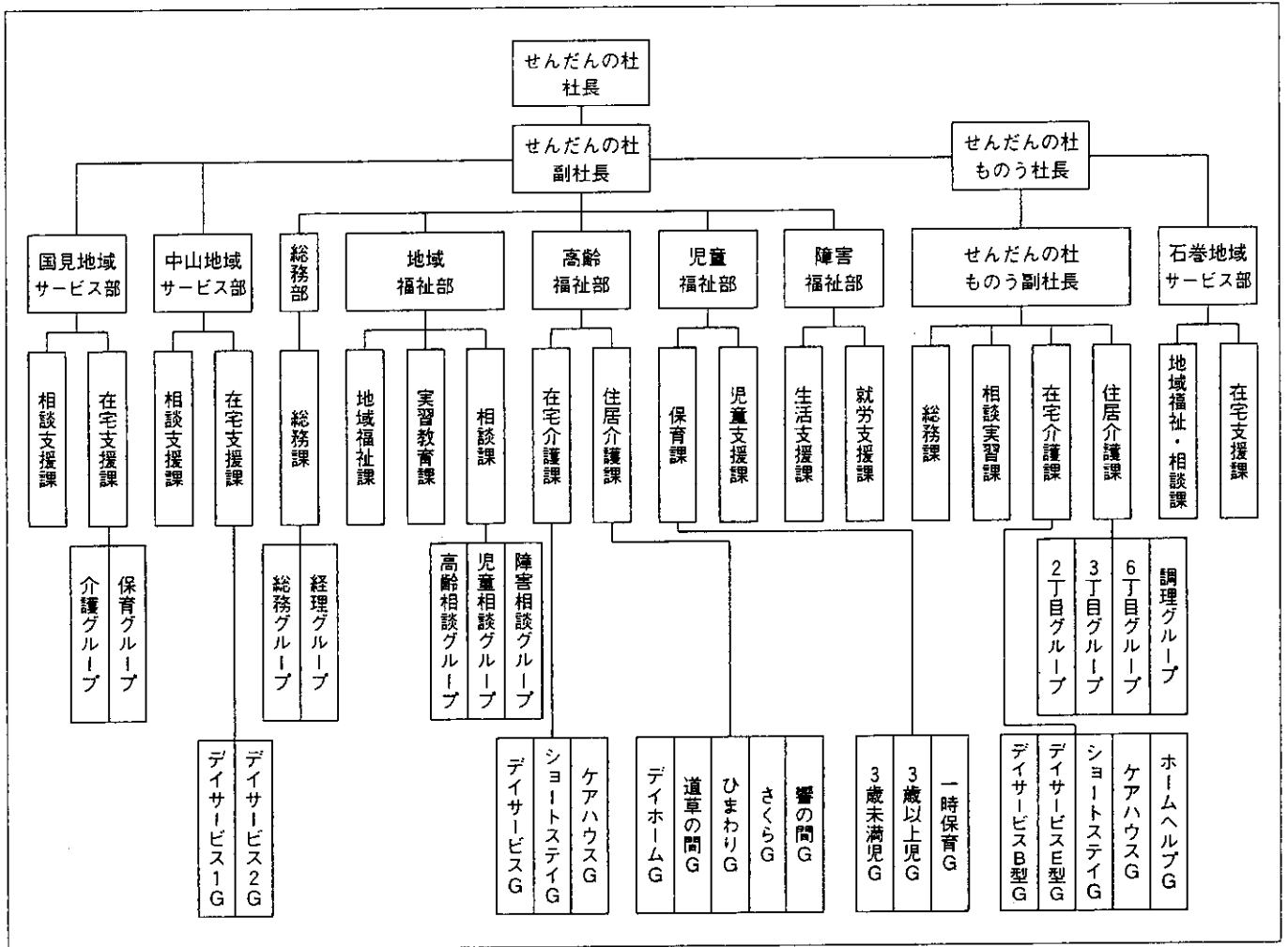
「せんだんの杜もう」では、町内を3つの小学校区に分け、各小学校区において地域の拠点（サブセンター）づくりを計画している（図2）。平成14年度は、中津山第一小学校区にデイサービス合築のグループホームを建設する予定で、ホームヘルプ、給食サービス、生きがいデイ、学童保育等の機能を併せ持つことを検討している。この計画のなかでも、突如、施設を地域のなかに建設するのではなく、すでに地域住民になじみのある建設予定地近くの老人憩いの家をお借りし、特養から逆デイとして数人の利用者が通っている。高齢者が地域のなかで普通に過ごすことで、自然と地域の方々も安心してお茶飲みに来るようになりつつある。この同じ目線での付き合いが、デイサービス合築のグループホームができた後まで継続できるよう活動を続けるとともに、真新しい建物ができたとしても関係が変わらないようお付き合いしていきたいと考えている。

地域から施設をみる

これまでの施設の議論では、まず施設をつくり、施設のなかに地域をいかに取り入れることができるかということに熱心になるあまり、地域というものがすでに存在していることを忘れていた。

わかるふくしネットワーク主宰の木原孝久氏と協働で研究したときのことである。栃木県足尾町という足尾銅山で有名な町に地域調査に伺ったとき、その当時（平成6年）で高齢化率が約30%で、日中は足尾町のメインストリートは高齢者のみが行き交うような高齢社会の最先端を行く老人の町であった。その足尾町を、地域福祉の計画を立てるための専門家による調査ではなく、住民の暮らす知恵をいただき、すでに足尾町に数十年と住んでいる住民の人々の助け合いネットワークがあるという仮説に基づき調査をしたのである。それは専門家としての視点ではなく住民の視

図1 せんだんの杜およびせんだんの杜ものう 組織図



点でまちをとらえるため、自分たちの足で町を歩き、直接、地域住民の自宅にお邪魔し、一人ひとりのこの土地で生きてきた生活の営みをお伺いした。それも数量調査ではなく、住民の日常的な付き合い（ネットワーク）を住宅地図に書き込み、一人を中心にしたネットワークをマップ化するという方法をとっていった（図3）。

ある民生委員は、地域の溜まり場（不動尊）を活用し、7～8人が膝を寄せ合いながら三々五々集まり、漬物や簡単な茶菓子を持ち寄りお茶飲みをすることで、「今日はだれそれが来てないね」「あの人は今日は隣町に行っているよ」など生活の隅々まで情報交換をしており、地域の人々の有力な情報源になっていることを語っていた。またある人は、自宅で商店を経営し、ひっきりなしにくるお客さん（お年寄り）に「立ち話じゃあなんだから、座ってお茶でも飲んでいってよ」とお茶を出しては世間話をしていた。それが、地域住民の憩いの場であり、情報交換の場であり、個別に

相談することのできる地域のよろず相談所でもあった。これは溜まり場をつくるから人が集まるのではなく、人が集まり場が生まれるのである。

ここで見てきたことは、足尾町には数々の社会福祉協議会でも計り知れないほど町内に地域住民の居場所（拠点）があって、行政や社協に相談するずっと以前に心配事を相談したり、近所での助け合いや付き合いを構築していたのである。サービスや制度がなくても、必要であれば住民は生み出していたということである。さらに、住民の助け合いのネットワークをマップに書き込んでいって気がついたことは、足尾町の南北に貫くメインストリートを中心にして、数々の居場所が存在していたことである。言うなれば、廊下を中心にして両側に居室が並んでいる特養と同じ形になっていたのである。町の開業医が医務室、住民の居場所（溜まり場）がデイルーム、社協の事務所（高齢者生活福祉センター・食事サービスの拠点）がケアワーカー室という

図2 桃生町におけるサテライトユニットケア（地域分散型）の高齢者福祉施設構想（案）

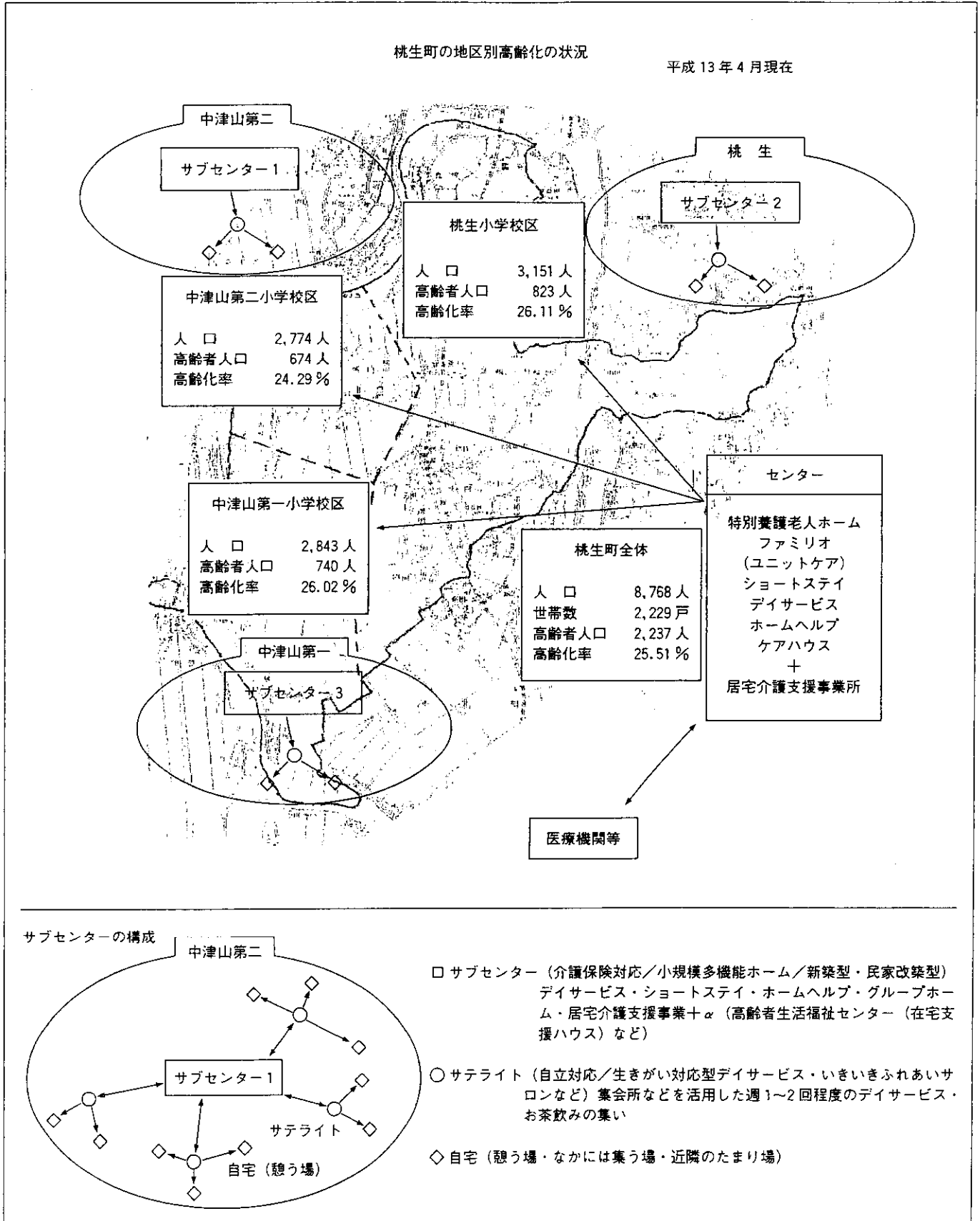
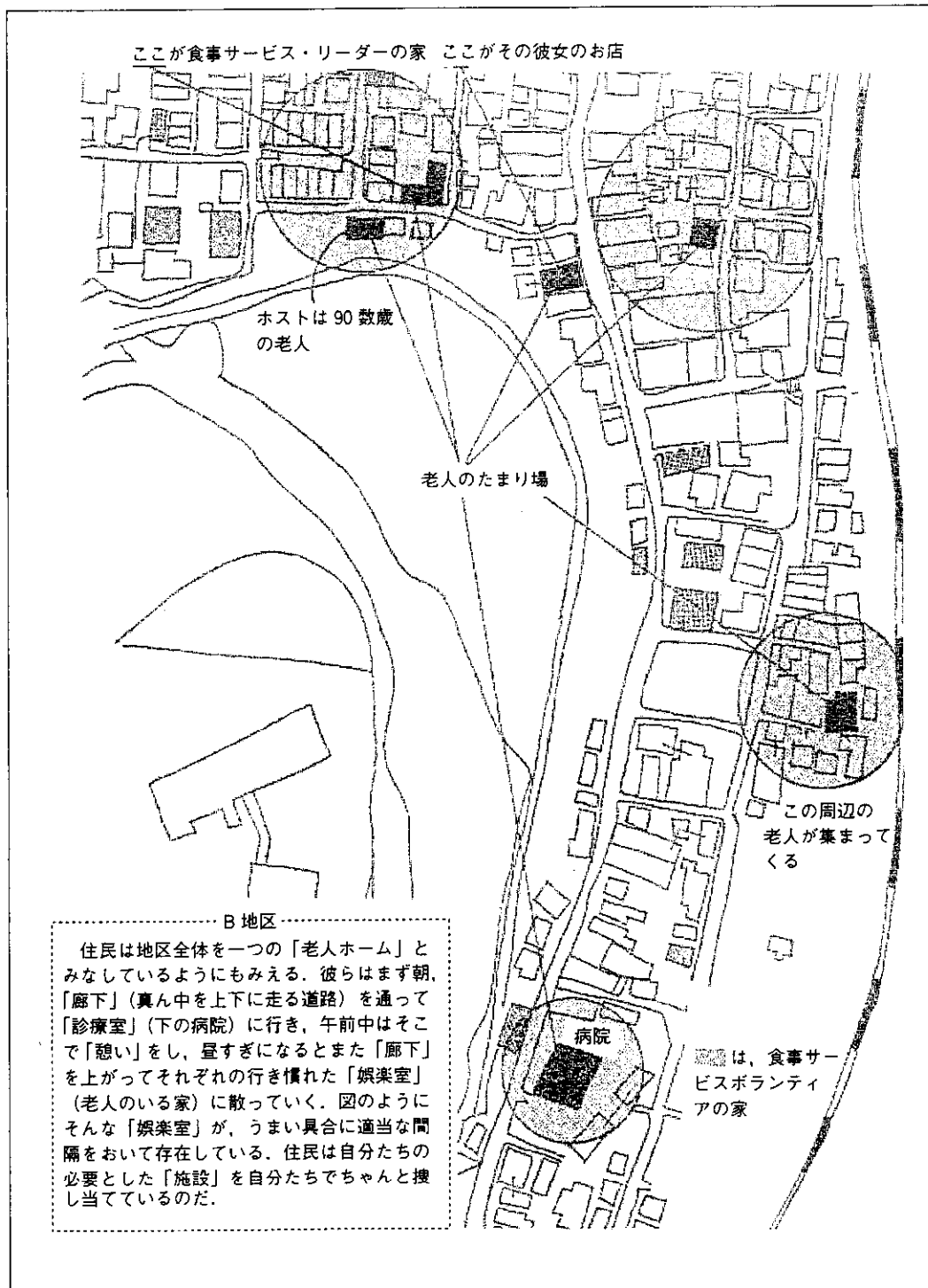


図3



(資料) 木原孝久著/栃木県社会福祉協議会編: 栃木県足尾町の人たちに学ぶ「住民主体の『福祉のまちづくり』の手法」, 筒井書房, 1994.

ことになる。老人ホームがない町に、自然と老人ホームの機能が町のなかにあると考えれば、あえて老人ホームをつくる必要はない。これまで老人ホームに地域を持ち込むことは考えても、地域を老人ホームに見立てるような発想は

なかったのである。

このような住民流の実態調査に関する取り組みは、ユニットケアを進めるせんだんの杜においても現在相談課と地域福祉課の協働で「中山地域探検隊」と称し、地域住民と

ともに町の探検活動に取り組んでおり、「せんだんの杜ものう」においては、相談実習課のソーシャルワーカーが利用者を中心としたコミュニティを強く意識して調査を行っている。施設で働く職員が施設からの発想ではない地域の流儀や助け合いの人間関係を紐解くことで、サービスを提供することが目的とならない、地域での生活支援と従来の福祉サービスを必要とする部分への支援のバランスを保つ取り組みを始めている。

これらの活動は、ユニットが地域へ飛び出し、地域で生活を行うことでの地域生活支援のための拠点づくりの意味合いと、施設の入居者が考える大切にしたい価値観を、施設においても振り返る学習の場としての機能の両面を有している。単に施設がユニット化してだけでなく、地域生活を支援していくことでまちが生きいきとしていきっかけづくりに施設が取り組んでいるのである。